

第四回 石油を求めて

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

4-1 初めてのサウジアラビア—「鍵がない」戒律の厳しい国

ベイルートに落ち着いた私はまずはサウジアラビアを訪れることにした。

石油の発見こそバーレーンより1年遅れたが、サウジアラビアは当時世界の石油埋蔵量とOPEC最大の石油生産量を誇る石油大国。政治的にもアラビア半島の盟主の立場にあり、英明と謳われたファイサル国王の下で「アラブの大義」を掲げて、エジプトとともに反イスラエルの先頭に立っていた。

私は単身で「紅海の花嫁」と呼ばれていたジェッダに飛んだ。

ジェッダは、貿易の中心地として、マッカ巡礼者の玄関口として古くから栄えた比較的開放的な街であるが、サウジアラビアはイスラームの戒律の厳しい国、私は細心の注意を払いながら入国した。

チェックインしたホテルのフロントで「鍵は？」と訊くと、「ない」と言う。古びたエレベーターで自分が泊まる3階に上がると、いくつかの部屋のドアが開いたままで、中が丸見えだった。「盗みを働けば手首を切り落とす」、「姦淫すれば袋に入れられて、石打の刑で殺される」などの厳しい戒律のサウジアラビアは治安がよく、鍵が不要だった。驚いた。

夕方、注意深く町を歩いた。店々が勢いよくシャッターを降ろし始めた。お祈りの時間である。人びとは、そそくさとモスクに急いだ。鞭を持った男たちが「お祈りに行かない不届き者はいないか」と見回っていた。初めて見るムタワ（宗教警察）だった。

お祈りが終わると、街にはすぐに人混みと喧騒が戻った。そこそこの店もあるが、バラック建ての店が多い。布地を商う店、サンダルなどの履物の店、鍋などの日用品の店、何でもあった。どの店も商品で溢れていた。店の中にちょこんと座っている親父や大声で商う親父。日本の商社マンたちも往時は繊維などの見本を詰めたカバンを持って、この親父たち相手に行商していた筈。彼らアラビア商人の粘っこさには手古摺ただろうと、苦労が偲ばれた。

その後、藤井ニチメン事務所長を訪れた。辺りは、暗くなりかけていた。事務所入口に子供が大勢集まっていた。「あの子たちは？」と訊くと、「お金を貰いに来ているんです。イスラームでは、ザカート（喜捨）が信者の義務です。金持ちが金を出すのは当たり前、貰う側は貰うのに抵抗がないんですよ」と説明してくれた。

私にもイスラームについて、イスラーム教徒には守るべき六信五行の信条と義務がある

という程度の基礎知識はあった。

六信は神、天使、啓典、預言者、来世、天命の6つの存在を信じること。神は唯一の神で、八百万の神ではないこと。天使は神の命令を人間に忠実に実行させるための存在、神と人間の連絡役であること。啓典とは神の言葉を集めた書物のことで、イスラームでは「旧約聖書」や「新約聖書」も啓典として認められていること。預言者とは神の言葉を預かりそれを他の人に伝える人で、イスラームではムハンマドが最後までもっとも偉大な預言者、モーゼやイエスなども預言者として認められていること。来世とは死後の世界、イスラームでは「現世は仮の世界、来世こそ本当の人生」とされていること。来世には「天国」と「地獄」があり、世の終末に甦ったあらゆる死者がアッラーによる最後の審判でどちらに行くか決められること。天命とは、この世の物事すべては神の意思によって定められているという意味で、未来も神が決めるということなど。

イスラームでは、信じるだけでは不十分。行動が伴わなければ本当の信仰とは言えず、その行動義務が、信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼の5行であることも。

信仰告白とは、「アッラー以外に神はなく、ムハンマドは神の使徒なり」と宣言すること。礼拝とは、1日に夜明け、正午、午後、日没、夜の5回マッカの方向に向かって礼拝すること。喜捨とは自分の財産の1部を貧しい人に分け与えること。断食とはラマダン月に、日の出から日没まで飲食を含むあらゆる欲望を断つこと。巡礼とは、一生に1度、聖地マッカに巡礼すること、ただし、経済的・身体的に可能な人だけとされ、この点が他の5行と異なることなど。

ジェッダのニチメンの事務所でムスリム5行の「喜捨」の実例を初めて見聞。「貰うのが当たり前」というのには驚いた。

ジェッダに初めて足を踏み入れた日本人は、日本人として初めてマッカ巡礼を果たした山岡光太郎である。山岡は明治42（1909）年12月10日にジェッダに到着した。

日露戦争で、名もない新興国が世界の大国のロシアに挑み勝利した。このニュースは、解放、独立を求めていたアラブの人たちに感動を与え、奮起を促すものとなった。山岡はサウジアラビアで戦勝国民として大歓迎を受け、マッカでシャリーフ（法王殿下）に謁見し、日本について熱心な質問を受けている。

翌日、私はサウジアラビアの国営石油会社（ペトロミン）を訪ねるべく、ジェッダから首都リヤドに飛んだ。

戒律が特に厳しいリヤド、私は極度に緊張していた。空港で荷物の受け取りを待っていると、「ジョニーウォーカー」や「ナポレオン」という英字が印刷されたダンボールがコンベヤーで運ばれていた。空き箱を梱包に使っていた乗客がいたらしい。禁酒国サウジアラビアでは何とも奇妙な光景だった。

私は仕事の前に、サウード家発祥の地であるダルイーヤを訪ねた。

サウジアラビアは「サウード家のアラビア」という意味である。サウード家の出自は、北部アラビア有力部族のアネイザ部族連合のマサリク支族の出身と言われている。15世

紀ごろにサウジアラビア東部のオアシスであるカティーフからダルイーヤに来たとされる。

サウード家は、1742年に父サウード・ビン・ムハンマドの跡を継いだムハンマド・ビン・サウードが始祖。当時、サウジアラビア中央部のナジュド地方のダルイーヤの弱小族長であった彼が1744年にワッハーブ運動の創始者であるムハンマド・アブド・ワッハーブと歴史的な同盟を結んでから、サウード家は興隆した。

イスラームが興って千年余り経った18世紀半ばごろまで、ベドウィンたちの間では聖者信仰や偶像崇拜が広く行われていた。この宗教的な腐敗を見てイスラームの原点への復帰運動を興したのがムハンマド・アブド・ワッハーブである。

この同盟によって、ワッハーブ派がサウード家を世俗的支配者と認め、サウード家はワッハーブ派のイスラームの原点への復帰を支持した。その結果、サウード家に従わない者はワッハーブ運動に従わない者として「ジハード（聖戦）」の対象とされた。

彼はリヤドを占領し、東部のアル・ハサも手に入れ、1803年にはマッカも占領しカルバラにも侵入した。第3代のサウード・イブン・アブドルアジーズの時代には、マッカ、マディーナを含む西部のヒジャーズ、西南部のアシール、北部やイラク、イエメン、シリアなどへも勢力を伸ばした。

当時この地域を統治していたオスマン帝国は制裁のために軍を送ってダルイーヤを攻め、1818年にはモスクや家々などを徹底的に破壊した。当時の第4代支配者のアブドッラー・イブン・サウードは降伏し、コンスタチノーブルに移送され処刑された。

ダルイーヤは、この時に破壊されたままの姿で残っていた。

第6代のトルキ・イブン・アブドッラーがアラブ軍を再編成し、リヤドを占領しここを都として支配をネジュド全体に広げ、さらにオマーン奥地やサウジアラビア東部にも支配を広げた。

息子の第7代のファイサル・イブン・トルキの後、サウード家では内紛が繰り返され、1888年には家臣筋に当たる半島北部のハイールを根拠にしていたラシード家にリヤドを占領され、サウード家はラシード家支配下の一勢力に転落してしまう。

その後第13代と第15代を務めたアブド・アル・ラハマン王がラシードに反旗を翻したが戦いに破れてリヤドから追放された。バーレーン、カタールの保護を求めた末に家族を連れてルブアルハーリー砂漠をさまよい、幾多の困難を重ねながら亡命先のクウェートに辿り着いたのは1891年のことであった。この中に、その後サウード家を再興した当時10歳のアブドルアジーズもいた。

1901年末、188センチの偉丈夫に成長したアブドルアジーズは、選抜された60人の精兵を率いてクウェートを出発した。砂漠の旅を重ねた末に、宿敵ラシード家が治めていたリヤドの町の北側の城壁の壊れた場所から数人の部下たちとともに町の中に入った。1902年1月のことである。

ラシード家の総督は当時、毎晩自宅から真向かいのリヤド城に泊まりにきて、朝のお祈り

を捧げた後に自宅に戻る生活を繰り返していた。総督の自宅を襲い妻たちを1室に閉じ込めて一夜を明かしたアブドルアジーズと部下たちは、翌朝総督が城から出立したところを襲ってこれを倒した。その時、アブドルアジーズはリヤドの市民たちに歓呼の声で帰還を祝福されたという。

アブドルアジーズはリヤドを固めた後で周辺の部族を順次その勢力下に治め、同年夏にはクウェートから呼び寄せた父君アブド・アル・ラハマンの後を受けて首長となった。

1906年のラウダ・マハンナの戦いでアブドルアジーズに敗れリヤド北のカシームを失ったラシード家はそのさらに北のジャバル・シャンミールをその後も支配しており、東部にはトルコ軍が駐留し、西部の紅海側は1908年にトルコによってマッカの太守に任命されていたシャリーフ・フセインが治め、サ우드家は当時四方を敵に囲まれていた。

その後、アブドルアジーズは1913年に50年に亘ってこの地を支配してきたトルコ軍を破って東部のハサを平定し、1921年にはイフワーン（同胞）軍団を率いてラシード家が支配していた北部のジャバル・シャンミール、1922年には、アシール山岳地帯を占領、1925年にはカリフである（全イスラーム教徒の最高支配者）ハーシム家のフセインが支配していたマッカ、マディーナ、ジェッダのあるヒジャーズ地方を平定し、1932年にサウジアラビアを建国し、初代国王となった。

ダルイーヤは、リヤドの北約30キロの茶褐色の乾いた道を上がった所にある小さな村落。家々のほとんどが崩れ落ち、砂に埋もれかかっていた。まだ人が住んでいた家もあり、私が訪ねると、子供たちがどこからともなく小路に集まってきた。その崩れかかった茶褐色の家々が夕日に映える光景は一幅の絵であった。

翌日私は当時原油DD契約を締結していたペトロミンにアリレザ原油部長を訪ねた。

当時石油は、売り手市場。日本の商社や石油会社は競って産油国に名前を売り込もうと務めていた。「高級時計を相手がもう要らないというまで配り続ける」という指令を出している石油会社があるとも聞いた。

そこまでする意思も金もない丸善石油社員の私は、金のかからない方法でこれに対抗した。私は精一杯まくしたてた。

「丸善の丸は日本語でパーフェクトリー、善はアラビア語と同じくグッドという意味だ。丸善石油とは、パーフェクトリー・グッド・カンパニーという意味。私の名前は遠藤晴男。英語流に言えば、ハロー！ジ・エンドだ。私は、パーフェクトリー・グッド・カンパニーのハロー・ジ・エンド。良い会社がハローとやって来る、以上終わり。私があれば、良いことが起きる」、「ハルオは、アラビア語ではヘルーだ。知っての通り、甘いという意味だが、ハンサムという意味もある。つまり、私は良い会社の、ハンサムなエンドーだ」と。

アリレザ部長のところには、世界中から石油会社関係者が訪れていた筈。日本の一石油会社の一社員の小柄な男の拙い英語での懸命のPRはどんな風に写っていたのであろうか。いま思うと、冷や汗ものである。

当時のリヤドを出国するには、事務手続の円滑化のために、前日にパスポートを空港の税

関に提出し、出国時にそれを返却して貰うシステムであった。

三菱石油のベイルート駐在員から、「リヤドを出る時に、税関でお前のパスポートは無いと言われた。前日に預けた、ない筈がないと押し問答したが埒が明かない。そこで、書類が送られるダスト・シュートを伝って探しに行ったら、私のパスポートが途中で引っかかっていた。それで出国できたが、その時外国人のパスポートも数冊引っかかっていた。あの人たちはどうしたのでしょうかね」という話を私は聞いていた。

「パスポートが無くなっていたら、どうしよう」と心配しながら、私は翌日空港に向かった。パスポートはちゃんと返却され、初めてのリヤド訪問を無事終えた。

このリヤドを最初に訪ねた日本人は、駐エジプト公使の横山正幸、石油技術者の三上知芳、通訳の中野英治郎である。

サウジアラビアで石油が発見された昭和13（1938）年に、東京の代々木に建設されたイスラーム寺院の落成式典に来日した駐英サウジアラビア公使から日本側に、「石油利権に関心があれば便宜を図る」との申し出があった。これを受けて日本政府からサウジアラビアに派遣された3人は昭和14（1939）年3月に「砂漠の豹」といわれた初代国王イブン・サウードに日本人として初めて謁見を果たした後に、国王の秘書長兼政治局長と石油利権の交渉を行った。

交渉は不成功に終わったが、1939年といえれば太平洋戦争突入の2年前、石油確保が日本の生命線という時代のことであった。

4-2 イラク—危ない副大統領

アルメニア人のグルベキアンは早くからユーフラテス河流域に石油のあることを確信し、1912年にトルコ国立銀行50%、アングロ・サクソン石油会社（後のロイヤル・ダッチ・シェル）25%、ドイツ帝国銀行25%の持ち株比率で「トルコ石油」を設立した。

1914年にアングロ・ペルシア石油会社（後のアングロ・イラニアン石油会社、BPの前身）がトルコ国立銀行の株を取得した時に、アングロ・ペルシアン石油株式会社とアングロ・サクソン石油会社から各2.5%のシェアを譲り受けて、グルベキアン自身も5%のシェアを取得した。彼が「ミスター5%」と呼ばれる所以である。

第1次世界大戦後の1920年には、戦勝国英・仏間の「サンレモ合意」によって、ドイツ帝国銀行のシェアが戦勝国のフランスに移譲された。ここで、トルコ石油の株主は、アングロ・ペルシア石油会社、アングロ・サクソン石油、フランス石油とグルベキアンとなった。

トルコでの戦争に参加していなかったことで「サンレモ合意」に呼ばれなかったアメリカは、中東の石油の重要性に着目していたエクソン社の強い働きかけによって、1922年にこれに加わるべく門戸開放交渉を強力に開始した。これが、アメリカが中東の石油への進出を目指した最初であった。

1925年にイラクの石油利権を獲得したイラク石油（1924年にトルコ石油から社

名を変更)は、同27年にはキルクークで大油田を発見し、イラクはイランに次いで中東で2番目の石油生産国となった。

1928年にイラク石油の株主たちがかの有名な「レッドライン協定」を締結したのは既述のとおりである。

この協定には、イランとクウェートを除くメソポタミアとアラビア半島での石油開発はイラク石油会社を通してのみ行うという重要な条項の他に、イラク石油の株式をアングロ・ペルシア石油株式会社、アングロ・サクソン石油会社、フランス石油と近東開発会社(エクソン・モービルなどの米国石油会社コンソーシアム)が各23.75パーセント、それにグルベキアン・グループが5%持つという条項が盛り込まれた。これが、アメリカが中東の石油に進出した最初であった。

長い間オスマン・トルコ帝国の支配下にあったイラクは、第一次大戦後の1920年にイギリスの統治領となり、翌年にはイギリスの後ろ盾でマッカの大シャリーフであるハーシム家出身のファイサル1世が元首として送り込まれたが、所詮はよそ者でクルド族を始めとする反乱が相次いだ。そして、1958年7月、革命によって国王や首相を初め国家の要人や特権階級の人びとが襲撃され、眼を覆うような残虐行為によって殺害された。

これによって、イラクは湾岸諸国とは違う社会主義の道を歩むことになった。革命後にイラクの指導者となったカセム将軍は1963年に反対派により銃殺され、その後を継いだアーリフ大統領も1968年のクーデターによって追放された。

その後継のバクル大統領の時から国内はやや落ち着きを取り戻して自由世界からも注目を集め始めたが、相次ぐクーデターや社会主義路線によって、イラクは警戒の眼で見られていた。石油供給上重要な地位を占めていたが、自由世界からやや隔絶された観があった。

私がイラクを初めて訪問したのは、そんな頃の1974年8月のことであった。

例によって一人旅、行き先が怖い国、初のイラク航空での旅ということで、不安な気持ちで白昼のバイルート空港を発った。

高峻なレバノン山脈を越え、1時間半の飛行の後に到着したバグダード空港は古い小さな空港だった。到着するなりバイルート空港で買った英字新聞を没収された。「新聞ぐらい、なんだっていうんだ。俺は善良な市民、悪いことなんか何もしていない」と無性に腹が立った。不愉快なイラクへの初入国であった。

空港からタクシーでチグリス河を渡った所にあったバグダード・ホテルに到着した。ロビーには大勢の人がたむろしていた。フロントでチェックインしようとする、「部屋がない」という。「バイルートで予約をしている」と粘っても、「政府関係の会議が入った」とつっけんどんな対応。バグダードでの最初の夜はホテルのロビーのソファでのごろ寝となった。

当時イラクでは日常物資が不足していて、日本人商社駐在員間では「米を5キロ貸してくれない?」、「今晚卵10ヶ貸して!」、「醤油ある?」、「日本から客が来る。来週バイルートで買ってきて返すから」とかがやりとりされていた。

商社の駐在員にとって、客の接待は重要な仕事の一つ。食料がなければ始まらない。当

時のイラクは、「卵が店に出たと思ったら、買占められてあっという間に無くなる」という状態であった。「検閲はある」、「ホテルは不足」、「物もない」で、不愉快な国であった。

しかし、どこの国でも情報省で本やパンフレットを貰って目を通し、出来れば博物館を訪れ、それから仕事にかかるという私のやり方に従って翌日訪れたバグダード博物館は素晴らしかった。

中に入る。大きな展示室の数々。その展示物の大きさ、華麗さは眼を見張るばかりであった。紀元前3000年から4000年のシュメール時代、紀元前2300年のサルゴン王のアッカド時代、紀元前1700年のバビロニア時代、それに続くヒッタイト、アッシリア時代以来の文字盤、彫刻、円筒印章、金銀細工、ハンムラビ法典などなど。この地に花開いていたまばゆいばかりのメソポタミア文明が、一堂に展示されていた。バグダード博物館は、私の心に強く残った。

翌日、INOC（イラク国営石油会社）に飛び込み、ラマダーン石油部長に面談。

例によって、「パーフェクトリー・グッド・カンパニーのハロー・ジ・エンド」の口上をまくしたてた。日本の石油会社の代表とか称する小男が突然飛び込んできて、同部長も目を白黒だったかもしれない。その後私の帰国後に来日した同部長が当社の原油担当者に、「丸善石油で最初にイラクに来た人がいた」と話していたことを聞いた。同部長には私の印象がよほど強かったのだろうか。

ホテルに戻ってTVを見ると、軍服姿の男がアラビア語で演説をしているのが目に飛び込んできた。演説内容は分からなかったが、態度の大きさが気になった。「この男は危ない！」と私は直感した。これが、私がサダム・フセインを見た最初であった。当時は、イラクの副大統領。その後大統領になり、イラン・イラク戦争、クウェートへの侵攻で始まる湾岸戦争、イラク戦争を主導した。その片鱗は当時すでにあった。

その年11月に入ってからすぐ、私は住友商事ペイルート事務所の杉山と情報収集のために再びバグダードに飛び、3日にはバビロンを訪れた。

有名な遺跡を見られるというので、やや興奮気味の私と杉山を乗せた車は、90キロ南の郊外にあるバビロンには1時間ほどで着いた。そこには、人っ子ひとり居なかった。敷地内に入って少し歩くと、原形も分からないほど崩れている土塁が続いていた。荒廃した盛り上がった土塊の上に立って見渡すと、往時の悠久の歴史の重みをずしりと感じた。

アムル人のスムアブムが紀元前1894年にこのバビロンを都に定め、その子孫でかの有名なハンムラビ法典を制定したハンムラビが紀元前1764年に全メソポタミアを征服して最初の黄金期を迎え、紀元前626年から539年までは、全メソポタミアを再制覇した新バビロニアの都として栄華を極め、この王朝の滅亡後も紀元前129年までさまざまな王朝に引き継がれた。

「日本では今日は文化の日、日本から1万キロ離れたこのバビロンの遺跡に立っているのは日本人1億人の中で私と杉山しかいない」と思うと、感慨がひとしおであった。

バビロンの遺跡は広い田園地帯の中、緑の畑が広がり、あちらこちらに立ち木が点在していた。私たちがバビロンを離れる頃、太陽はその田園風景の西に沈もうとしており、辺りはたそがれで暗くなろうとしていた。

「吉田正春使節団」団長の吉田は、大倉組の横山とともに日本人として初めて明治13（1880）年にイラクを訪れている。クウェートに立ち寄った後シャトル・ア・アラブに入りバスラに1泊した後、船でバグダードに向かい5日後に到着した。

そこから、3日間の旅程でバビロンに向かったが、吉田が50度を上回る暑さで熱病に罹り、昏睡状態に陥った。そこで、バビロンの20キロ余り手前の地点で引き返さざるを得ざるをえなくなり、「其遺憾の程は限りなけれど」と記している。

4-3 OPEC会議 - 原油価格決定の最前線で

1960年に創立されたものの鳴かず飛ばずの状況にあったOPECは、1971年にリビアのカダフィがオキシデンタル石油を手始めに国際メジャーから原油の値上げを勝ち取ってから活気づき、同年のテヘラン協定とトリポリ協定、1972年のジュネーブ協定で、原油の価格決定権を握り、同年12月の4湾岸諸国と石油会社間で結ばれたリヤド協定で石油事業への参加権を獲得した。

さらに1973年の第4次中東戦争勃発後の生産制限や対米禁輸の石油戦略を発動したOPECの影響は著しく増大し、OPECの一挙一動に世界中の目が注がれた。最初はスイスのジュネーブに置かれていたOPECの本部は、その当時はオーストリアのウィーンに置かれていた。

当時日本からベイルートに進出した石油会社8社の1つの昭和石油中東事務所の畑山から「9月12日と13日とウィーンで閣僚会議が開かれる。OPEC会議がどういうものか見てみたい。OPEC会議には産油国から大臣以下大勢の石油関係者が集まる。顔を売っておくメリットもある。当社は、所長以下3人で出かける。一緒に行かないか」との誘いがあった。畑山は東京外大の同級生、そのよしみからの声掛けであった。

私は本社の許可を得て、ベイルートからウィーンに飛んだ。宿はウィーン市の中心にあるシュテファン大聖堂近くにあったホテルだったと記憶している。

その時の閣僚会議の目的は、同年第4四半期（10～12月）の原油価格の決定であった。私たちは会議の朝、OPEC本部に押しかけた。ロビーに入ると、そこは人が溢れ、押すな押すなの大混雑。世界各国から大勢の報道陣が集まっていた。

イランの瘦身のアムゼガル蔵相がロビーに現れると記者たちが一斉に群がり、多くのマイクが差し出された。記者が堂々とインタビューをしている。「ああ、これが著名なアムゼガルか」と見とれる。やがて、顔見知りのUAEのオタイバ石油相が入り口に姿を現した。集まる人はなく、同大臣はそのまま建物の奥に姿を消した。OPECでも主要メンバーとして名の知れたクウェートのアチキ財務石油大臣の姿も見えた。しかし、報道陣が群がるでも

なく、同大臣も人混みの中を歩いて奥に姿を消した。

入口の方に大勢の人ばかりができていた。サウジアラビアのヤマニ石油鉱業相だ。OPEC会議をアムゼガル蔵相とともにけん引しているキーパーソンである。突き出される何本ものマイクの前で、テレビ・新聞などで顔を見慣れた大臣と記者たちとの一問一答の真剣勝負が目の前で始まった。これが世界中の注目を浴びているOPEC会議の現場、世界トップの記者の取材かと私はただただ目を丸くしていた。その側でやりとりをタイプライターに叩き込んでいる者がいた。そのまま即時にこのニュースが世界中に流れる仕組みに驚いた。

そこで、取材のためにロンドンからウィーンを訪れていた高橋朝日新聞特派員と知り合い、午後に朝日新聞の支局で会う約束をした。

それまで時間がある。せっかくだからと昭和石油の一行と近くのドナウ河の見物に出かけた。初めてみるドナウ河は川幅が広く満々たる水を湛え、流れは急であった。波を立てて流れていた。遠くには、1949年に世界的にヒットした映画「第3の男」で有名となった観覧車が見えた。

川の中ほどのボートから煙が上がっている。船上には3人ほどの人が見えた。「なんだろう？」と訝っているうちに、ちらちらと赤い火が見え始め、黒煙も勢いを増していた。「船火事だ！」と確信するには、そう時間はかからなかった。

火がみるみる広がっている。「あの人たち、どうなるのかな」と思っている間に一人が川に飛び込んだ。やがて、もう一人も飛び込んだ。

そのうちの一人が、私たちがいた岸边近くに流されてきた。われわれは土手の道を川下に向かって全速力で走った。その目の前を、救命胴衣をつけた若い女性が「ヘルプ！ヘルプ」と声を上げながら、急流の中を浮き沈みしながら流されて行った。運よく川下で棹を差し出す人がいて、どうやら助かったらしかった。初めてのドナウ河でのとんでもない事件だった。

午後、朝日新聞支局に行くと、テレックスがカタカタと音をたてて流れていた。高橋特派員ははさみで器用にその中からOPEC関係の記事を切り抜いていた。今度の閣僚会議の焦点は、原油価格問題。「OPEC加盟国をまとめたアムゼガルが値上げを主張」、「ヤマニは強烈に反対した」、「協議は明日継続して行われる」というような記事がテレックスから流れていた。

これらのテレックスの情報源はOPEC本部のロビーで、アムゼガルやヤマニとやり合っていたロイターやAFPやAPなどの世界的な通信社の記者たち。この時に私は新聞社はこういう記事を通信社から買い、必要な情報をはさみで切り取りながら、自分の体験と合わせて記事をつくるのだと知った。

石油のことは高橋特派員よりわれわれの方がプロ。「OPECの基準原油となっているサウジアラビアのアラビアン・ライト原油の価格は、世界的な石油過剰を背景に国際石油会社によって1960年8月以降長い間1.80ドル/バレルで推移してきた。それがOPECの攻勢により、1971年2月のテヘラン会議で2.18ドル/バレルになり、同

4月のトリポリ協定によって2. 285ドル/バレルに、1973年6月のジュネーブ協定によって3. 011ドル/バレルに引き上げられた。さらに、第4次中東戦争勃発後に湾岸6ヶ国が一方的に5. 119ドル/バレルに引き上げ、同年12月のテヘランでのOPEC会議で翌1974年1月から11.65ドル/バレルに引きあげた。今回のOPEC閣僚会議で、これがさらに引き上げられるかどうか注目される」と懇切に説明した。

畑山は昭和石油調査部の出身。さらに以下も説明した。

「1885年に、米国のスタンダード石油会社が主要生産地での原油価格を原油の生産者に通告したことから始まった。それが、米国の石油業界誌「プラッツ・オイルグラム」に公示されるようになり公示価格と言われるようになった。国際石油会社の支配力の強まりとともに、1920年代には世界的な統一原油価格が採用されるようになった。当時米国のメキシコ湾岸からの石油輸出が世界の大半を占めていたので、世界の石油消費国での原油価格を米国メキシコ湾岸の原油価格に各地までの運賃を加えて決めていた。「ガルフ・プラス方式」である。

「中東での原油生産の増大につれて、運賃がほとんどかからない地域の中東原油の購入者もメキシコ湾岸からの運賃を支払わねばならないという矛盾が生じた。そこで中東も基準地点に追加され、「ガルフ・プラス方式」と「ペルシャ湾プラス方式」の並立となった。中東原油の価格は、メキシコ湾の積出港価格にペルシャ湾から仕向け地までの運賃を加えて決定され、米国産と中東原油との均衡点地点は地中海のマルタ島付近となった。

「この決め方は、米国産と中東原油のコストが同じという前提に立っていたが、中東原油のコストは米国産原油よりはるかに安い。割高な中東原油価格に不満を持つ買い手のために、均衡地点も地中海からロンドン、さらに米国東海岸まで延長され、中東原油の価格は引き下げられていった。こうして中東原油は、それ自身の公示価格をもつようになった」、

「石油価格は、メジャーが決めていたが、OPECの台頭で両者協議事項となり、1972年のジュネーブ協定で産油国が価格決定権を握った」ことも付け加えた。

翌朝もOPEC会場に顔を出し、午後は朝日新聞事務所に集まり、会議の結果を入手して、その結果を本社に報告した。

1974年9月14日付けの朝日新聞朝刊1面に、「ウィーン高橋特派員」の名前入りの「原油価格3.5%引き上げ—OPEC閣僚会議で合意 サウジは加わらず」という大きな見出しの記事が載った。

4-4 クウェートとのLPG直接交渉再び-初のDD契約成立

1974年暮れにアブダビに出張していた私は、「共同石油と共に、LPGの直接交渉のためにクウェートに向かえ」との本社指令を受けて、アブダビからクウェートに直行した。

その年の夏に宮沢部長と散々粘った挙句に不調に終わった商談を、今度は共同石油と組

んで他社に隠密裏に行え」という指令であった。

共同石油からは白石中東事務所長がバイルートからクウェートに入ってきた。東京からも丸善と共同石油の各関係商社のニチメンと伊藤忠社員がやってきた。白石よりは私の方が年上ということもあって、交渉は私が主導する形となった。われわれに相對するのは、夏と同じアリ次官補。

クウェート側と東京本社側とのテレックスや商社を通じたやりとりで基本的な条件の合意が出来ていたのので、交渉と言ってもその時に私たちに与えられた任務は、石油省と相對で契約書草案をチェックし合えばよかった。それらが無事に終えイニシャル署名を終えた私たちは、あとは年明けに東京本社から偉い人に来て貰って本調印すれば済むと、意気揚々とバイルートへ引き上げた。

ところがである、日本最初のLPGの産油国との直接交渉の成立はそんなに生易しいものではなかった。丸善石油と共同石油がこの契約に署名しそうだということが知れると、日本国内で「条件面で産油国側に甘い。こんな契約をして貰ったら日本のためにならない。困る」という非難の声が上がったのである。

海外の私たちは、「交渉成功へのヤッカミではないのか。放っておいたらよい」と思ったが、「このままでは国内販売面にも悪影響が出る。手を打たなければならない」というのが、本社の判断であった。「再交渉しろ」という指令で、私と白石は年が明けるやクウェートに逆戻りした。関係商社のニチメン東京からは北川、伊藤忠バイルートからは宮本が、それに共石本社から山本課長が加わった。

一旦合意した条件の改定交渉だ。本社の対応は理不尽だとは思いつつも、宮仕えの身では指令に従う以外ない。忸怩たる思いもなくはなかったが、私たちはさっそくアリ次官補との再交渉に入った。1-12月契約数量は、丸善と共同石油が各12万トンの合計24万トン。

「トン当たり128ドルは高すぎる。下げて貰わないと買えない」。「困ったことを言う。合意したではないか」とのがクウェート側の言い分。前年7月にはクウェート側は130ドルで一步も引かなかったが、日本各社との交渉が不調に終わったことからトン当たり2ドル下げ、10-12月期の石油メジャー提示の120ドルよりは高かったが、本社側はこれを受け入れていたのである。

「そちらに困ると言われても、このままではこちらが困る。値下げして貰わないと契約に調印できない」と私たちは言い張った。アリ次官補の顔が曇る。「困った。上と相談してみる。明日来てくれ」、「何時ですか」、「そう、12時」、「OK、さようなら」。翌日12時きっかりに石油省へ。「どうですか」、「上のOKをとった。値段はトン当たり125ドルでいいよ」。トン当たり3ドルの値下げ。

「ところで、決済条件のL/C (Letter of Credit=信用状) は不味い。TT ((Telegraphic Transfer Remittance=電信送金決済) にして貰いたい。そうでないと、買えない」、「困るなあ。考えさせて。明後日、10時に来てくれ」、「よい返事を期待していますよ」と石油省を出る。決済条件交渉は、本社からの追加指令であった。

翌々日、また石油省へ。「彼は来ていない?約束は10時。アラブ人は時間にルーズ、時間は守っても貰わなければ困る。ここで待たせて貰う」と秘書に毒づきながら、部屋の入口で待つと、次官補が姿を見せた。

「お願いの件はどうか」、「上と連絡がつかない。明日また来てくれる?」、「何時ですか」、「11時」、「OK。何とか考えて下さいよ」。「日本は古くからクウェートの原油を買っている。クウェートの石油生産量の10%強は日本に行っている。日本は大事なお客さんでしよう。言い分を聞いて!」と捨て台詞。

翌日の11時に石油省へ。「おはよう、元気?」、「上々!」と門番と挨拶を交わして、次官補室に直行する。ほとんど毎日の石油省通い、門番ともすっかり顔なじみになっていた。

「どうか、昨日の件は」、「OKだ。上の了承を取り付けた」。

翌日、また石油省へ。「ところで、もう一つ、サイト(支払い期日)だが、これではどうしようもない。60日に延ばして欲しい」。「なんとかDD契約第1号を成立させましょうよ。それが、日本とクウェートのためになる」、そんな次元の話から、「あなたは必ず偉くなる。私だって、マシな役職に就くだろう。お互いこれから長い付き合いになる。何とか私の言うことも聞いて!」と理屈にならない次元の話も持ち出して、交渉を続けたのであった。

1つの条件を勝ち取っても、他社からまたイチャモンがつくというような国内状況の中で、本社はわれわれに次々と追加交渉を指示するしかなかったのだろうが、私は白石と連日辛抱強く石油省に通って、最終的に日本側の要求を100%受け入れて貰うことに成功した。10日間にも及ぶクウェート石油省との厳しい交渉の日々であった。「疲れたあ!」の一言の交渉であった。

私にとっては、交渉成立もさることながら、アリ次官補との密接なコンタクトを通じて、アラブ人理解が進んだことが嬉しかった。当時まだなじみの薄かったアラビア半島で、アラブ人の義理、人情、生活、考え方の一端を身近に体験することができた。

次官補の方も気を許したのか、「日本の商社の仕組みを教えて欲しい」、「日本の名門出身の女性を嫁にしたい、紹介して欲しい」などの依頼もしてきた。

その後、同次官補は石油大臣、大蔵大臣に昇進した。あの時「お嫁さんを紹介しておけば」と、いささかの悔いが残っている。

直接交渉が妥結した夜、ホテルで、私と白石、部下の小原、関係先の商社員など数名で打ち上げパーティーを行った。パーティーの詳細は省くが、交渉の緊張感から放たれて全員大いに羽目をはずし、クウェートではあるまじき放歌高吟となった。

全員寝たのが翌朝の5時。目が覚めたのは、ベイルート行き飛行機の出発時間30分前。

チェックアウト手続きは現地の商社員に任せて、私たちは慌てふためいてホテルを飛び出し、タクシーで空港に向かった。われわれの到着を待っていた飛行機に何とか乗り込み、無事ベイルートに戻った。

飛行機を待たせたのは、私にとって人生で最初で最後の体験であった。機内に飛び込んだ時に満員の乗客から一斉に冷たい視線を浴びてバツが悪かった情景はいまも記憶に残って

いる。

その後、私は日本で最初のクウェートとの原油直接交渉にも携わることになった。本社からの指令でバイルートからクウェートに飛び、私は仲介した住友商事本社石油部の荒井と合流した。

例のアリ次官補は大蔵次官に転出していて、同じくアメリカの大学を出たハーリッド次官補が交渉相手。この取引は住友商事が仲介していたので、私は契約文の最終チェックさえすればよいという立場。苦労は、「他社に悟られぬよう隠密行動をとれ」ということだった。

やがて、この成約も日本の新聞に載り、高橋駐クウェート日本大使の公邸でも「よくやった」とご馳走に預かった。バイルートに帰ってから、日本の石油関係者から、「遠藤さんは冷たいよ。どこに行っているのかと思ったら、あんな仕事をしていたのだから」と風当たりが強かったのも記憶に残っている。

4-5 クウェートでの休日 - 森の石松のファイラカ島参り

ファイラカ島は、クウェート市の東約20キロのアラビア湾に浮かぶ大きさ43平方キロメートル、三宅島より一回り小さな島である。私が訪れたのは、1974年も夏が過ぎようとしている頃であった。

現在ファイラカ島はクウェート市とフェリーでつながれているが、当時は王宮側の船着場からダウ船で行かねばならなかった。ダウ船とは、アラビア湾岸諸国特有の底の浅い木造船のことである。

船に乗り込んだ外国人は私だけ。あとは、すべて現地の人たち。勾配のある広い甲板には古い絨毯が敷かれている。私は、その端にそっと腰を下ろした。

真ん中に車座に陣取った数人のクウェートの若者たちは、乗り込むやトランプを始め、「入ったら」という感じで、私の方をチラチラと見ていた。アラビア語が出来ない私は見守るしかなかった。

船は穏やかなアラビア湾を、ファイラカ島目指してゆっくりと進んだ。木の甲板、青い空に高く伸びる帆柱、べた風のアラビア湾上の心地よい揺れを感じていた私は、当時人口に膾炙した浪曲の一場面、金比羅参りの「森の石松」を思い出していた。

私がクウェートの若者たちに「お兄さんたちよ。喰いねえ、喰いねえ、寿司喰いねえ。お兄さんたちはクウェートの人だって？こちとら、日本の生まれよ」と言い出すのにピッタリの雰囲気であった。

「ところでお兄さんたちよ。日本の石油会社、知っていなさいかい。一に日本石油、二に出光興産。「その次は？」、「共同石油」。「おっと、兄さん、まだあるだろう。次は？」、「丸善石油か。あそこは前経営者の放漫経営で苦しいって言うじゃないか」との会話でもあれば、ダウ船上の光景は、「森の石松、金比羅参り」にそっくりであった。

やがて、私はファイラカ島に上陸した。紀元前4世紀、マケドニアの若き王アレキサンダ

一がエジプトやペルシャのアケメネス王朝を滅ぼし、その勢力は東はインドにまで及んだ。ファイラカ島にはそのアレキサンダー軍の要塞跡が残っていた。

そこを通り過ぎて石畳が敷かれた広場の奥まった所に、小さな博物館があった。戸口に入る、やや薄暗い館内に展示されている鋤や鍬の農機具。砂漠の国に農機具があること自体が不思議だったが、驚いたのは、それらの鋤や鍬が日本のものと酷似していた。砂漠のアラビア半島でこういうものを見ようとは、私は思いもかけなかった。

その上に、農作業をする時に顔を覆うのに使われた被り物が、私の出身地新潟の隣の山形で使われていたものとそっくりであった。

「昔山形に好色な殿様が居て、誰彼となく美形の女性に手をつけたので、農作業をする女性たちが自衛のために顔を隠した」と聞いたことがあった。ハンコタンナと呼ばれる被り物である。このファイラカ島で見た物は、布質、図柄、形など、ハンコタンナと類似のものであった。

この頃アブダビ内陸部のアラインに博物館が開館した。小さいながらまとまった展示がされていた。このアライン博物館にも農機具が展示していたが、それらも日本のものとそっくりであった。牛に鋤を引かせている模型、マジュリス（集会室）の模型なども、衣服がアラビア服、大地が乾いた黄色い土という以外は、日本の戦前の農家の生活風景とそっくりであった。

火を焚いて車座に座るアラビアの男たちの模型は、一日の野良仕事を終えて分家の男たちが本家に集まり囲炉裏を囲みながら談笑する戦前の日本の農家の風景と変わらないものだった。

なお、このアラインの博物館には、アブダビ石油が故ザード国王に寄贈した立派な日本刀も展示されていた。

アラビア湾の海上交易を独占していたころのディルムンが400キロ離れたこのファイラカ島に植民地を建設していて、その時代の遺丘が複数発見されているという。さらに、その前にウル第3王朝が植民地を建設していたことも判明しているという。南メソポタミアから銅の産地のオマーンに向かう船に水や食料を供給したり、船の修理を行ったり、あるいは天候不良の際に避難する中継基地として建設され、海賊対策の艦隊なども停泊していたと聞いた。

古い歴史のある島であった。

3-6 中東の旅のテクニク - 「ドゥ?」、「イツ・ミー」

ベイルートを拠点に石油を求めて西東と駆けめぐる「中東三度笠」は生易しいものではなかった。

仕事もさることながら、当時の中東では、ビザを取る、飛行機に乗る、ホテルに泊まることが至難の業であった。飛行機の切符を買うことやホテルをリザーブすることは難しくは

ないが、実際に飛行機で飛ぶ、ホテルのベッドにありつくことが至難の業だったのだ。

第一次石油危機の後、石油とオイルマネー、またその金で湾岸諸国が一斉に始めた街づくり、工業化、消費物資の輸入などでのビジネスチャンス求めて、世界中の人々が中東に群がった。交通手段や宿泊施設の整備がこれに追いつかず、絶対的に不足するのは当然のことであった。

私もオマーン、バグダードやテヘランなどでホテルのロビーや事務室に寝泊りをしてきたが、こんなことは当時の中東では日常茶飯事であった。ホテルを事前に予約していても、政府関係の有力者が来れば、そんな予約は無視された。飛行機も同じ。幸運にも搭乗してシートベルトを締めても、有力者が来れば降ろされるという状態であった。

その上に、中東の人は仕事上の対応も感覚も違う。こんな中で中東を走りまわるには、プロの技が必要であった。

1974年夏のバイルート、暑い日差しが照りつけていた。私は、ビザをとるべくサウジアラビア大使館を訪れた。建物の中はごった返していた。砂漠で生活していた人たちには列を作って並ぶ必要がなく、アラブの人には並ぶという習慣がなかった。

怖れをなしては、いつまで経ってもビザの申請はできない。幸い、私は身長163センチの短身。小まわりが利く。人混みをかき分けている内に、列の前の方にまで進んでいた。辺りには、アラブ人やインド人などのきつい臭いがしていた。私は何でも自分でやるという主義。ビザ取りは現地使用人がする仕事、自分で来る日本人はまずいかなかった。

いきなりトントンと肩を叩く者がいる。「こんな所に知り合いなんかいる筈がないが」と振り返ると、カンドゥラを着たアラビア人が、私に「並べよ！」と言った。前に突き進む私に、アラブ人も我慢ならなかったのであろう。私は、さすがに引き下がった。アラブ人に並べと言われようとは私は思いもしなかった。この話を後日駐在員仲間にしたところ、「アラブ人に並べと言われたのか」と笑われてしまった。

同年秋のバーレーン空港。サウジアラビア行きのチェックイン・カウンターは押すな押すなの大混雑。私はもみくちゃにされながらやつのことでカウンターにたどり着いた。係員に切符を渡した。切符を持つ手があちらこちらから差し出されているから、私は背伸びして、どの手よりも1センチでも係員の近くに差し出して、係員に切符を渡した。

次は、切符の名前とボーディング・リストとの照合である。係員が「エンドー？そんな名前載っていない」と言う。「そんな訳ない。リザーブしている。よく見てくれ」と言ったが、名簿に名前が無いと言う。「町に戻ってもホテルは取れないだろう。野宿は真っ平。サウジアラビアでは、ホテルの予約は一応してある」と私は必死だった。

「ちょっと、名簿を見せろ！」と自分でチェックを始めると「DO」という文字が目止まった。「DO？アラビア人にも欧米人にもそんな名前はない。「そうだ、これは、END OのDOだけが書かれているんだ」と、とっさに思った私は、「ドウ・イツ・ミー(Do, it's me)」と叫んでいた。

係員は、「OK」と言って、いとも簡単にボーディング・カードを発行してくれた。あま

りにも大勢の人がいるので、綿密に確認をする余裕がなかったのか、私の気合のせいであったかは定かではなかったが、無事に搭乗券をゲットできた。

次は、搭乗前の自分の荷物のチェック。当時アラビア半島の空港では乗客の荷物を搭乗機の前に並べ、乗客に自分の荷物を確認させていた。確認をすると係員が白いチョークで印をつけて、搭乗機に積み込むシステムである。それも無事に終わった。

座席に座って、シートベルトを締めた。その後シェイクも現れず、飛行機のドアがしまった。バーレーンでの野宿を回避して、私は無事バーレーンを後にしたのであった。

この時の経験から、ベイルートに戻って中東を走りまわるのに苦労していた駐在員仲間に、「飛行機に乗る良い方法があるよ。切符をブランクにして買っておくのさ。そして、空港で乗りたい飛行機名を自分で書き込み、ついでにOKと記入する。そして、空港カウンターで誰よりも先に切符を差し出す。ボーディング・リストで自分に似た名前のところを『これは俺だ』と指差すのさ。どうせ切符を買う時に航空会社の代理店で切符に「OK」と書いて貰っても、役に立たないのだから」と私は面白おかしく話した。

その後「日本人で不届きなヤツがいる。自分で乗りたい飛行機に勝手に『OK』と書き入れて、飛行機に乗っている」との話題を日本人社会に提供したようだった。

1974年秋、私は初めてリビアを訪れた。カイロから首都ベンガジ経由で国営石油会社があったトリポリに向かった。当時「中東の暴れん坊」と呼ばれたカダフィ大佐がリビアを統治していた。英語の看板が一切なくすべてアラビア語、入国カードもアラビア語で書かなければなかった。不気味だった。

アラビア語の入国書カードは機内で隣の乗客に記入して貰った。トリポリに着いたのは、午後の4時ごろ。タクシードライバーに拙いアラビア語で行く先のホテル名を言ったら、ちゃんと連れて行ってくれた。ホテルに着くと、予約をしていたにもかかわらず、「会議のために、ホテルは満員」と追い出された。

仕方なしに、ドライバーに頼んで連れて行ってもらった次のホテルも満室であった。私のホテル探しに付き合っても金にならないドライバーは、「もう勘弁してくれ」と私をそのホテルの玄関に置きっぱなしで走り去ってしまった。

外は暗くなり始め、雨が降り始めていた。旅行カバンの一時保管をフロントに頼んだが、「預かれない」とつれない返事。私は旅行カバンとアタッシュケースを持って、英語の通じない、雨のそぼ降るトリポリの町で立往生。

困り果てていたら、一台のタクシーが通りかかり、手を上げたら停まってくれた。しかも、幸いなことに、ドライバーがフランス語が出来た。「今晚のホテルを探している。手伝って」とありったけのフランス語で、私は意を伝えた。

初老のそのドライバーは親切な人で、私のホテル探しに付き合ってくれた。夜7時過ぎに訪ねた5軒目のホテルで、「夜10時まで待てれば、1部屋空く」ということで、ついにベッドにありつくことが出来たのだった。

延々と3時間余りのホテル探し、実際にベッドにありつくまで合計6時間。あのフランス

語を話したリビア人の粹な姿と親切さは、リビアの怖いイメージからは想像できないものだった。

トリポリに3日ほど滞在し、日本大使館やリビア国営石油会社を訪ねて情報収集をし、またチュニジアとの国境近くの有名なローマ時代の遺跡などを見て廻った。カダフィの印象が強すぎて、なんとなく怖ろしく感じていたリビアは、よい国だという印象が強く残った。

緑も多く、気候も温暖、ヨーロッパ人もけっこう多かった。考えて見れば、リビアは地中海沿岸、自然的な環境が良くて当たり前であった。ホテルの食事もまずまず、これで酒さえ飲めれば言うことはないと残念であった。

当時の中東の旅は、熟練の技の要る仕事であった。

主な参考文献：

「サウジアラビア」(小山茂樹、中公文書、1994年)

「サウジアラビア現代史」(岡倉徹志、文春新書、2000年)

「アラビア縦断記」(山岡光太郎、1912年、『明治シルクロード探検紀行文集成』第22巻、ゆまに書房、1988年)

「アラビア紀行」(中野英治郎、明治書房、1941年)